

男はつらいよ

映画文学人生論

原作：山本周五郎（1960）
監督：山田洋次（1969-95年）脚色：山田洋次 森崎東
出演：車寅次郎 渥美清 撮影：高羽哲夫
諏訪さくら 倍賞千恵子 音楽：池野成
諏訪博 前田吟
諏訪満男 中村はやと 吉岡秀隆

手前、生国と発しますところ

葛飾柴又です

青べか村から根戸川沿いに上流へ向けて自転車をはしらせると、およそ一時間で柴又村にたどりつく。フーテンの寅さんの故郷だ。

その寅さんが小舟で青べか村に流れつき、しばらく暮らしたことがある（第五話 望郷篇）。

寅さんは豆腐屋に住み込んで、真面目に働いていた。今度こそ心を入れ替えて、額に汗し、アブラまみれになって、地道な暮らしをするつもりでいたらしい。豆腐屋の一人娘の節子（長山藍子）にぞっこん惚れていた。

節子との結婚によって、映画『男はつらいよ』シリーズは完結するはずだった。それまでの失恋の相手は柴又帝釈天題経寺の御前様の娘（光本幸子）、中学時代の恩師の娘（佐藤オリエ）、温泉宿の女将（新珠三千代）、幼稚園の先生（栗原小巻）だが、どうみても誰も釣り合わない。

長山藍子の演じる豆腐屋の娘となら釣り合う。はたからみても一緒になれば、お似合いの夫婦になれそうだった。やくざな稼業から足を洗って、堅気の暮らしをする願ってもないチャンスと思われたが、運命は寅さんと節子との結婚による青べか村への定着を許さなかった。

失恋した寅さんはふたたび旅に出る。北は北海道から、南は沖縄まで日本列島のあちこちの大道で「結構毛だらけ猫灰だらけ」などとあやしげな

男はつらいよ

映画文学人生論



口上を並べたてて、テキ屋稼業の行商を続けた。おかげで、『男はつらいよ』シリーズは延々と第四十八作まで続く大河映画になる。

私は四十八本のDVDを観ながら、人生とは何か、家族のありかた、放浪と定住、恋愛と失恋、故郷回帰などについて考え、しみじみと過去の思い出にふけた。

「人はなんによって生くるか」を考えさせてくれるのが文学だとすると、『男はつらいよ』にも文学の要素がある。シェイクスピアの喜劇が文学なら山田洋次脚本の『男はつらいよ』も文学ではないだろうか。

寅さんという。「天に軌道がある如く、人それぞれに運命を持って生まれ合わせております」

「大したもんだよカエルのしよんべん、見上げたもんだよ屋根屋のふんどし」「四角四面は豆腐屋の娘。色は白いが水臭い。四谷赤坂麴町、チャラチャラ流れるお茶の水。粹な姐(ねえ)ちゃん立ちしよんべん」ってなどうだ。

シェイクスピアも尻尾をまいて、逃げだしそうになるようなすごい名文、名セリフだと私は思うが、どんなものだろう。

しかし、寅さんは本を読めば頭が痛くなるか、眠くなる。文学などには猫の毛ほどにも興味を示したことがない。

猫の恋結構毛だらけ猫灰だらけ